

F. ショパン

— スケルツォ第1番とポーランドのクリスマス —

松 本 由美子

Frederic Chopin: "Scherzo No. 1" and Christmas in Poland

Yumiko Matsumoto

はじめに

くだけるような激しい感情が渦巻く2つの不協和音。ショパンの「スケルツォ第1番」のこの冒頭の部分を初めて聴いた時、私は心の奥深くに潜む何かが強く揺さぶられたように感じた。中間部の穏やかで柔らかに包み込むような優しいメロディー、最後に再び不安と激しさが現れる。この激しさと優しさの入り混じった音楽に、小学生だった私はすっかり虜になってしまった。毎朝早起きをして、レコードを聴きながら、楽譜もなしに憑かれたようにピアノに向かっていった。次第に、作曲したショパンの心情と、その背景にある故国ポーランドに想いを馳せるようになっていった。それから10年余、大学で師事した客員教授に勧められ、ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽院大学院研究科に大学卒業と同時にピアノ演奏で留学することになった。

ポーランド留学中、私はワルシャワ・ショパン音楽院の依頼で、ポーランド国内の様々な都市のクリスマスコンサートに毎年出演させていただいた。その時、必ずプログラムに入っていたのが、ショパンのスケルツォ第1番作品20であった。また、その土地での風習は大変興味深く、今でも鮮烈に印象に残っている。ポーランドでクリスマスの時期に歌われるコレンディー

(クリスマスキャロル)は、古くから伝わるものもあり、大変心に浸みる曲が多く存在する。ショパンは、このコレンディーといわれる曲のメロディーをモチーフにし、幾つかの作品を世に残している。

今回取りあげるスケルツォ第1番は、コレンディーをモチーフにした最も有名な作品である。亡命先で、ショパンがいかなる状況におかれても、この祖国のコレンディーは、ショパンの心の支えであり、力となつたのであろう。ショパンの作品の中でも特に興味深いスケルツォ第1番と、その作品の背景であるポーランドのクリスマスについて述べたい。

1. ポーランドの国土と歴史

ポーランドは、ヨーロッパの中央に位置し、東西交通の結節点にある。そのため世界から様々な思想や芸術を吸収しながら独自の文化を形成し、西ヨーロッパの社会や文化にも少なからず影響を及ぼしてきた。

国名のポーランドは『野の国』を意味し、その名の示すとおり、森と湖に囲まれた豊かな自然に恵まれ、どこまでも平らな大地が続く。この地形が他国の人々を大いに魅了し、彼らの所有欲をかきたて、国土は度々戦場となり世界の地図からその姿を消してしまった歴史をもつ。

ショパンは、ポーランドが分割され世界地図から消えた時代に生きた。20歳までワルシャワで過ごした青年ショパンは、分割前の祖国の再建を願う学生や知識人の抵抗運動にも参加していた。このことが、ピアノの詩人と呼ばれるショパンの作品のすべてに影響を与えているといえるだろう。

2. ショパンのスケルツォ

スケルツォとは、元来「おどけた」とか「冗談」を意味する。古くは、バロック時代の声楽曲に見られ、17世紀に入ると、イタリアにおいて器楽曲としても用いられるようになった。古典時代の作曲家が、交響曲のメヌ

エットのかわりに用い、ベートーヴェンがソナタや交響曲の3楽章に多く用いた事により、急速に広まっていった。しかし、古典時代には、元来の「おどけた」や、「冗談」という意味での楽曲はほとんど存在しなくなり、代わりに急速なテンポでドラマティックな楽曲を意味するようになっていた。その後19世紀に入ると、ロマン派の作曲家達によって夢見るような優雅さと軽快さを加味されて進展する。

ショパンは、スケルツォを彼独自の世界観と内面に秘めた感性により、独立した楽曲にまで発展させた。同時期の作曲家シューマンによれば、ショパンのスケルツォを聴いて、「もし、“冗談”が黒い着物を着て歩くのならば、“真面目”はいったい何を着て歩けばよいのか」と評していた。ショパンは4曲のスケルツォを作曲したが、それらはともに暗く深刻な内容の楽曲となっている。ショパンのスケルツォは、伝統的な音楽形式の上に彼独自の小品を確立させたことにより、ロマン期の楽曲として、かなり重要な位置づけになっているといえる。

3. ショパンの4曲のスケルツォの特徴

ショパンの4曲のスケルツォは、自らの創作活動の最も盛んな時期に作曲されており、ショパンのピアノ曲の中でも特に傑出した作品となっている。これらに共通する所は、4分の3拍子で、速度記号がPrestoで作曲されていることである。楽曲全体には、内面の心の葛藤が複雑に描き出されている印象が漂っている。形式は、基本的には3部形式で書かれているが、彼独自の語法により自由な発展が見られる。さらに特徴的なのは、伝統的な3拍子で書かれているが、4小節をかなり急速な速度で1小節を1拍としてとり、4小節4拍をひとまとまりとして演奏するところである。

ここでショパンのスケルツォの概要を紹介する。

松 本 由美子

スケルツォ第1 番口短調 作品20

作曲 1830-33年

(ウィーンあるいはシュトゥットガルトにて)

出版 1835年

献呈 トマス・アルブレヒト

明確な3部形式で書かれており、4曲のスケルツォの中でも特に純粋な形で器楽曲として構成されている。激しく怒り狂うような第1部と第3部、中間部には、前半と後半とで対照的なゆったりとした甘美なメロディーが奏でられる。ここで用いられる主題には、18世紀頃から歌われているポーランドのコレンディー「眠れ、幼子イエズス」の旋律が盛り込まれている。この強い対照は、あたかもポーランドの歴史と人情を表現しているようである。

作曲の動機は、1830年にワルシャワで勃発した「11月蜂起」である。当時20歳のショパンは、祖国ポーランドを離れ亡命したが、一時ウィーンに寄留していた。季節はクリスマス、ショパンは、真夜中に街中のシュテファン寺院を訪れた。このころのショパンの心境は、大変不安定なものであった。ウィーンに着いて1ヶ月がたとうとしていたが、その間にワルシャワで起きた「11月蜂起」の知らせを聞いたのである。友人のティトウスは、蜂起軍に加わるためワルシャワに駆け戻ったが、ショパンは、激しく揺れ動く気持ちを抑えてウィーンに留まった。その年のクリスマス・イヴに、ウィーンの聖シュテファン教会で一人で物思いに耽っていると、かつてないほどの孤独感に襲われ、心の中に憂鬱なハーモニーが湧きおこった。同時に、幼い日に母が歌って聞かせてくれた子守唄代わりの「眠れ、幼子イエズス」のメロディーが流れ、この曲に結晶したのであろうといわれている。スケルツォ第1番の冒頭に見られる2つの不協和音とそれに続くモチーフ、そして中間部のコレンディー「眠れ、幼子イエズス」の旋律を盛り込んだ部分である。この曲は、シュテファン寺院での経験と、国

外から祖国を想うショパンの心情を如実に表した作品と言える。

作曲された場所については、ウィーンという説が多いが、出版されたのが1835年ということと、作品の前後の音楽的な表情が、その後訪れたシュトゥットガルトを想起させるので、シュトゥットガルトということも考えられる。

スケルツォ第2番変ロ短調 作品31

作曲 1835－1837年

出版 1837年

献呈 アデーレ・デュ・フルステンシュタイン伯爵令嬢

4曲中、最も有名で演奏頻度の多い曲である。ショパンがマリア・ヴォジンスカに失恋した年に作曲された。3部形式で書かれているが、主題と関連性のあるモチーフが複雑に絡み合いソナタ形式に近い形をとっている。

冒頭の第1主題プレスト、ソット・ヴォーチェで奏でられる3連音符とそれに続く4分音符は、リズムが「ところてん」と聞こえることから、日本の音楽大学生の間で流行語となったいわれのある曲である。しかし、曲の内面性は大変深刻なものである。最初の4小節は問いかけではじまり、後に続く4小節はそれに対する明確な答えであると、ショパン自らが弟子に指導したといわれている。第2主題コン・アニマは、優美な世界へと誘う。右手の美しいメロディーは、左手のアルペッジョに彩りを添えながら支えられ、変ト長調、変イ長調と転調し、変ニ長調へと行きつく。それに続く結尾部は、アルペッジョで華やかに繰り広げられる。再び最初に戻り、これまでのことをほぼ全てもう1度反復する。中間部トリオ・インテルメッツォは、夢みるような美しい和音の響きをたたえ、イ長調からホ長調へと転調し、この部分も繰り返され展開部へと移行する。展開部は、これまでのモチーフとなる素材を大変みごとに消化し、技巧的な趣向をこ

松 本 由美子

らしたものとなっている。展開部の再現の後、力強い輝かしいコーダで、曲をしめくくっている。

スケルツォ第3番嬰ハ短調 作品39

作曲 1839年（マジョルカ島）

出版 1840年

献呈 アドルフ・グートマン

この曲は、ジョルジュ・サンドとマジョルカ島に滞在していた時期の作品である。しかし完成は、旅行から帰ってショパンの健康が回復した後である。

構成は、A-B-A-B- コーダで拡大されている形をとり、ソナタ形式風に作曲されている。愛弟子グートマンに献呈され、かなりピアノスティックな演奏技巧を要求される曲でもある。はじめに24小節の序奏の後、両手オクターブによる第1主題が力強く現れる。メノ・モッソの変二長調から、第2主題が始まる。この主題はコラル風で、華やかなアルペッジョが特に印象的である。再現部では2つの主題が転調して現れ、最後のコーダは、大変熱情的な高まりをもって曲をまとめている。

スケルツォ第4番ホ長調 作品54

作曲 1842年

出版 1843年

献呈 クロティルド・デュ・カラマン嬢とジャンヌ・デュ・カラマン嬢。

この曲は、ノアーンのジョルジュ・サンドの家で作曲された。持病の結核はかなりショパンの体を蝕んでいたが、作曲面では、非常に快調で、サンドの献身的な看病と愛情に包まれた環境の中で、精神状態も安定していたようだ。明るく軽快で、元来のスケルツォ『おどけた』を意味する曲に

限りなく近い曲調となっている。

構成は、3部形式を大きく拡大させて書かれている。第1部主題は、リズムカルな中にもおおらかさがたゞよい、非常にダイナミックな構成を形づくっている。ピウ・レントから中間部が開始され、旋律が大変美しく演奏される。クレッシェンドの後の興味深い再現部を経て、コーダでは、様々な技巧をこらし情熱的に曲をまとめている。内容的にも大変円熟味を感じさせるものがある。

4. スケルツォ第1番口短調作品20の解釈

第1部 プレスト・コン・フォーコ

冒頭に見られる2つの不協和音は、ショパンのウィーンでの経験が結集されたものである。最初のフォルティッシモは不安の中にも希望を求めるように、続くフォルツァンドで不安とやるせなさ絶叫が入り混じった感情表現になっている。1小節目 *ff* のすぐ後に見られる *>* の表示は、一見ディミヌエンドにも、長いアクセントともとれる。これはショパンの特徴的な表示で、その部分にかかる音楽表現上の力を意味するものである。5小節目もだいたい同様な意味合いをもっている。叩きつけるのではなく、極めて深い音で渾身の想いを込めて演奏する。9小節から主旋律が始まる。まるで嵐の様に旋風を巻き起こしながら上昇していく様は、祖国ポーランドが挫かれても叩かれても、なおも祖国独立の為に立ち上がろうとする人々の力強さとショパンの信念を重ね合わせて感じさせる所である。14-16小節の和音と単音によるスタッカートと繰り返しの、苛立たしさを表している。22-24小節も同様、17小節はさらに気持ちが上昇していく様に演奏する。25小節は、高みに達した所から旋回を伴って広い音域による下降を行う。29小節左手のアクセントを伴う減5度の和音は、ためらいながら何かに寄り添う様に、33小節のオクターブ低く奏されるメロディーは、シンコペーションのリズムを生かし、スタッカートとアクセントを効果的に演奏

する。37小節からは、心の深い所から沸き起こる叫びに近い大きなうねりを感じさせ、やがて43-44小節に表れる3つの和音に結集される。ここの右手、嬰イ・ロ・嬰ハと左手オクターヴ、ハ・ロ・嬰イの左右逆行の音域の広がり、大変興味深い。44小節からオクターヴで左右の問いかけによるかけあいがあり、続いて58小節で不安な気持ちから解き放たれた慰めにも似た旋律がユニゾンで奏される。44、56小節のリテヌートは、あまり遅すぎないで部分的にテンポをルバートするようにする。69小節からは、ソットヴォーチェで主旋律が展開された形がアジタートであらわれる。クレッシェンドを何度も繰り返しながら上昇し、101小節でffに行き、103小節のセンプレ・ピュー・アニマートを続け、109-110小節でfffに達する。ここでは、左右のアクセントを効果的に響かせ、不安の中で孤独に自問自答し答えを見いだすために喘いでいる若いショパンを想像することができる。121-124小節の4小節の繰り返しでは、左手にアクセントがついていない。おそらくショパンは、前4小節との響きの違いを表現したかったのだろう。125小節からは、最初の主旋律が再び戻ってくる。230小節のユニゾンでは、慰められ、新たな期待感に胸を膨らませていくように。298小節のホ・ヘ・嬰ヘ・嬰ヘの半音階進行に注意をはらって、明るく展開するハーモニーを優しく愛情を持って導くように演奏する。

第2部 モルト ピュー レント

ここは、ポーランドのコレンディー「眠れ、幼子イエズス」の旋律が盛り込まれ、ノクターン風に情感豊かに美しく奏される場所である。ポーランドでは、クリスマスの時期に教会や街角のいたる所で、誰でも聞くことのできる大変伝統のある有名な曲である。同主調の口長調という調性感を生かして、ゆったりと歌わせること。叙情性のある中間部と劇的な前後の対比により、この曲全体にバランス感のある豊かな構築性を与えている。305小節から右手の内声部に、「眠れ、幼子イエズス」の始めの旋律があらわれ、ソット・ヴォーチェ・エ・ベン・レガートで、静かに落ち着い

てできるだけめらかに演奏されると良い。ここでのベン・レガートは、現代のピアノ奏法で、ペダルをハーモニック・レガートになるように長めに踏み替えて演奏して良い。318小節リテヌートの後、319小節から右手の上声部に旋律があらわれ、懐かしさとともにもう戻ることはない昔の楽しかった思い出と複雑に絡み合う祖国ポーランドへの想いを伝えようとして、ショパンは一心に模索しているように感じられる。322-325小節および同様に書かれた小節において右手にあらわれる装飾音符は、他の楽曲でもショパン自身が指示して来たとおり、右手の最初の音と左手の拍の頭とを揃えて弾くこと。330、332、362、364小節に見られる逆向きの長いアクセントまたはディミヌエンドは、その後に続く音の強調であり、逆向きのアクセントの付けられた音そのものが、クレッシェンドできるピアノ以外の他の楽器を意識して書かれたようである。369小節からは、右手内声部の旋律を pp で優しく歌い、374小節左手のアクセントの嬰イ音は、音進行の高さと和声の明るさを表現している。また、嬰イ音にナチュラルの付いた出版もあるが、それは編者によるもので、ショパン自身によるものではない。楽しかった思い出もつかの間、現実の不安と恐怖に呼び戻され、385小節で再び叫びのような不協和音とともに、足をひきずりながらも立ち上がろうとする、ショパンの心の奥底に潜む葛藤を浮き彫りにしているようにも思えるのである。

第3部 Tempo 1

モルト・コン・フォーコで、嵐のような主要主題が再現される。アクセントを効果的に生かし力強くうねりながら展開していく様は、ショパンが自分自身に問いかけそして確かめているかのように思える。556小節まで、第1部と同様である。

562-567小節は、右手のホ・嬰ホ・嬰ヘ・トのクロマティック進行の支えを感じながら、アツチェランドしていく。

569小節からリゾリユート・エ・センブレ・ピュー・アニマートで始ま

る所は、左右2オクターブほど駆け上っており、アクセントとシンコペーションのリズムが絶妙なバランスを発揮し、祖国の独立への期待感と不安とやるせなさがそこはかとなく表現されている。ffで始まる581-584小節の長いクレッシェンドは、不安の中で高まる緊張感を表している。続く祈りにも似たアルペッジョの下降進行は、やがてつぶやきになり、594小節のfffで再び絶叫のような不協和音を奏でる。

601小節からはコン・ブリオが始まる。右手の分散和音による下降進行と、左手の和音と単音によるスタッカートの繰り返しには、苛立たしさが感じられる。609-617小節の両手オクターブのユニゾン、アクセントを効果的に生かし勢い良く駆け上っていく。そこには、ショパンが何者かに生涯をかけて力強く立ち向かっていく姿があり、続く情熱的な和音は、この曲全体に力強い生命力と精神力を与え曲をしめくくる。

5. ポーランドのクリスマス

前ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の出身国であるポーランドは、カソリック教徒が全人口の95%強を占めている。そのためクリスマスは、1年のうちで最も重要な行事の1つとなっている。ワルシャワのスタレ・ミヤスト（旧市街）の王宮広場には大きなクリスマスツリーが据えられ、高層アパートの窓の一つ一つに色とりどりのクリスマスツリーが飾られると、街のあちらこちらからコレンディーが聞こえてくる。

コレンディーはポーランドの古い民謡であり、17世紀頃には存在していた。それ以前に存在していたものや、新しく作曲されたものなど知られている曲で5-60曲はあると言われている。現在、クリスマスに歌われているポーランド語で出版されている曲は、代表的なもので26曲存在する。しかし、イギリスやドイツ、フランス、イタリア等の民謡がポーランドにもたらされた際に、ポーランドの民謡と同化しポーランド民謡として伝えられたものも多く、それらを含めると100曲近く存在すると言われている。

ポーランドで最も代表的な「眠れ、幼子イエズス」は特に親しまれており、誰でも口ずさむことができる曲である。

ポーランドのクリスマスでは、ワルシャワ市内をはじめ国内すべての教会でキリスト降誕祭の飾り付けとクリスマス・ミサが行われる。ほとんどの人々は教会の儀式に参列し、カソリック精神の賛美歌を歌い、ヴェソーウィツヒ・シフィヨント（おめでとう）と共に祝福の言葉を交わしあう。また、家庭においても、代々受け継がれてきたカソリックの精神を感じさせるものがある。壁には日常的に聖書を題材とする絵画が飾られ、イバラを冠の形に小さくしたものを目のつく所に飾るという風習がある。クリスマス・イヴは親族だけでお祝いを捧げ、クリスマスの日には、家族と友人知人の他に必ず1人多く食器が用意されるのである。それは、貧しい人が訪れた時にも、食事を共にし、神を祝福するためだということである。

食事は、鯉（karp カルプ）料理を食べ、油で調理されたフライやマリネといった感じのものが多い。また、保存食としても有効な果物（西洋なし、すもも等）を煮たコンポートや、たくさんのキノコ料理が出された。ポーランドには森が多く、キノコの採れる季節には一家総出でキノコ狩りに出かけるという習慣がある。私が一番気に入っていた料理は、マッシュルームのクリームスープ、ヒラタケに似たキノコのソテー、ナメコのようなぬめりのあるキノコのマリネ、とまだまだたくさんある。赤ピーマンやタマネギをスライスしたマリネも絶品で、特に赤ピーマンの鮮やかな赤色は、クリスマスの食卓を華やかに彩る、欠かすことのできない大事な食材である。一通り食事がすむと最後は必ずデザートで締めくくられる。クリスマスの時期に作られるケーキは、けしの実の入ったマコーヴィエツツと呼ばれるものの他に、普段よりもずっと日持ちのするものを用意しておく。ショウガの入ったパン・クッキーのようなケーキは、保存がきくうえに装飾が施されており、隣人にプレゼントとして配ったり壁に飾り付けたりする。日が経つと固くなってくるので、薄く切って少しずつ口の中で溶かして食べるようにする。

生活の知恵として代々受け継がれて来た保存用の食べ物は、作物の豊富な夏から秋にかけてたくさん調理され、貯蔵庫である地下室に置かれる。そして、冬のこの時期に出されて、少しずつ食べたり飲んだりする。

6. ショパンの祖国への想い

スケルツォ第1番短調作品20は、「季節もの」といわれ、クリスマスコンサートでは必ず演奏される。

ワルシャワの中央にあるホテルのコンサートでこの作品を演奏した後、私はワルシャワ中央駅のキオスクに立ち寄った。

人々でごったがえす駅の構内に、朗々と響く聞き覚えのあるメロディー。ショパンの「スケルツォ第1番」の中間部に挿入されているコレンディー「眠れ、幼子イエズス」ではないか。2階の手摺から1人の中年の婦人が、広い駅の構内によく通る歌声を響かせていた。その歌唱法は、全くもってスラブ的である。ヨーロッパの中央に生きたポーランドの人々の芯の強さが想像される。

ポーランドの首都ワルシャワの中央を、南北に流れるヴィスワ河の左岸にあるツェントルム（中心部）と右岸のプラガ（住宅街）を結ぶ、ポーランドの英雄の名を冠したポニャトフスキー橋の上を、トラムに揺られながら、ショパンの祖国への想いを感じることができたように思った。

F. ショパン／スケルツォ第1番とポーランドのクリスマス

○楽譜 ショパン「スケルツォ第1番」より

Dédié à Monsieur L. Lisbrecht

SCHERZO

Opus 20

不安の中にも希望を求めろ。 1831-1834
Presto/con fuoco ♩ = 120

やがて不安とやるせなさと絶望が
入り混じり、たものになていく。

表観上の力を喪失する。

ここから主旋律が始まる。嵐の様に旋風を巻き起こしながら上昇していく。

さらに勢持ちが上昇していく様に。

左手は苛立たせを奏している。

高みに達したところから旋回を伴い広い音域による下降を行う。

ためらいながら何かに寄り添う様に。

旋風の音

© 1979 by Wiener Urtext Edition, Musikverlag Ges. m. b. H. & Co., K. G., Wien
Wiener Urtext Edition Nr. 50061
Erste Auflage / First Edition

288

297

第2部

305

Molto più lento ♩ = 108

310

315

320

288

297

第2部

305

Molto più lento ♩ = 108

310

315

320

再び絶叫のような不協和音を奏する。

594 *fff* *con brio*

[*] P V_7 [*] P I

右手、分散和音による下降進行。

602

左手、和音と単音によるスタッカートの繰り返しは、奇立たさを表している。

607 *fz* 07'50...

両手オクターブのエンジンには、アクセントを効果的に。

612 (2)

勢い良く馬駆け上っていく。

和音に強い生命と精神力を感じて演奏する。

617 *fff*

V_7 I IV I II_7 I

*) 次のように弾くのが望ましい。

Recommended variant:



(<注解>の<詳解>参照)。

(see Critical Notes, Detailed Comments).

松 本 由美子

○楽譜 コレンディー「眠れ、幼子イエズス」

Lu- laj- ze, Je- zu- niu, mo- ja pe- reł- ko, lu- laj, u-

lu- bio- ne me ple- ści- deł- ko. Lu- laj- ze, Je- zu- niu,

lu- laj- ze, lu- laj, a Ty Co, Ma- tu- lu, w pla- czu u- tu- laj.

参考文献

○楽譜

Jan Ekier, "Chopin Scherzi", Wiener Urtext Edition, Musikverlag Ges. m. b. H. & Co., K. G., 1979

Jan Ekier, "Chopin Scherzi", Towarzystwo im. Fryderyka Chopina, Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 1985

Bernard Ladysz, "Koledy Polskie", Grupa Image, 1992

○文献

Tadeusz A. Zielinski, "Chopin", Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 1993

田村 進「ポーランド音楽史」雄山閣出版、1980

遠山 一行「ショパン カラー版作曲家の生涯」新潮社、1988

アーサー・ヘドレイ編、小松雄一郎訳「ショパンの手紙」白水社、1965